翠玉の瞳

真羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翠玉の瞳

【コード】

N9088M

【作者名】

真羅

【あらすじ】

お嬢様に仕える執事の物語

僕が11歳の時、彼女はこの世に生を受けた。
泣き声のする部屋へとローレンス家当主、ギルダーと共に向かった。

ギルダーが開けはなった扉の向こう…

夫人に大切そうに抱えられたモノ

「ギルダー…静かに」

「あつ…ああ…君が無事で良かった」

ギルダー当主は、震える足で夫人の元に行き、夫人の額に口づけを落とした。

「やあ…元気に生まれてきてくれてありがとう」

それから夫人に抱えられた　の頭にキスをする。

「女の子よ…」

「そうか！君にそっくりだ。さぞかし美しくなるだろう」

「ふふ…そうかしら？目元なんて貴方そっくりよ」

そんなお2人の様子を僕は扉の入口で待機し見ていた。

手持ち無沙汰な僕に気づいた夫人は、手招いた。

「リオ、貴方も来て」

ワクワクする気持ちを抑えて、僕は夫人の元へ歩みを進めた。

白い布に包まれたそれ。

僕は覗きこむ。

目を瞑ったままの小さな小さな彼らの天使。

金色の髪に透き通った白い肌。

「……かわいい…」

僕は将来、彼女が大きくなる姿が楽しみになった。

ギルダーが当主が言つたとおり、美しい女性になるだろう。

「…そうだリオ、この娘の専属執事にならないか？」

「えっ？僕が？」

「君は、ご両親から帰館するには、まだ早いと言われていたはずだ」

「はい。けれど僕はまだ見習いです」

「良い機会じゃないリオ？」

僕はこの夫人が苦手だった。

嫌いとかそんなのではなくて、単純に僕自身が婦人に憧れていたからだろう。

だから僕は逆らえなくて。

「畏まりました」

僕は首を縦に振っていた。

気づいたのは誰だろうか。

いつだろうか。

彼女の目があまり見えていないことに。

「生まれつきのものですが…ただ霞がかっているだけみたいですね」

彼女…ディアの目の前に彼女の好きなぬいぐるみをちらつかせると微かに反応し、手で掴もうとする仕草をする。

「と言う事は…」

ギルダー当主が不安げに医者聞く。

「視力が回復する事もあります」

「そう…全く見えていないわけではないのね」

少し安堵した夫人の肩をギルダー当主は支えてさすっていた。

もしかしたら視力が回復すると言われて随分…月日が過ぎ、
26
歳になった。

僕も一人前の執事。

両親から帰って来ないか？と言う手紙が届いた。

僕はまだ帰るわけにはいかない。

ディア：様の、あの深緑の瞳に僕の姿を映すまでは。

その旨を手紙に記し、実家へと送った。

帰って来た手紙には、お前がしたい事をしる途中放棄だけはするな。と書かれていた。

「リオ、私舞踏会なんて行きたくない」

沢山のドレスに囲まれ佇む少女。

「ディア様も、もう15歳。社交界デビューの時期です。これを逃すと……」

「いいの…誰も私なんて…目の不自由な女を娶る人なんていないわ」
少し顔を歪めて涙を堪える彼女を見ていられなくて、僕は震える小さな体を抱きしめた。

「ディア様、特訓しましょう。誰もディア様の目が不自由だとわからない様に」

「え……」

「それにディア様は完全に目が見えていないわけではありません」
「……私、頑張ってみる」

そしてさらに年月が経ち彼女が17歳を迎えた時、ローレンス家に一大事が起きた。

それは、貴族社会でよくある事業拡大の失敗。
ギルダー当主は莫大な負債をおってしまったのだ。

今まで僕はローレンス家にて滞在していたが、ローレンス夫妻に
言われて強制的に帰館する事になってしまった。

「リオ！私が許しません！貴方は、私の社交界デビューを目にする
まで帰るとは言わなかったじゃない?!」

荷物を纏めた僕にすがりつき癪癪を起こす彼女の手をそっと握っ
た。

「僕がディア様の盾になれるように…」

そつと着こなしたスーツの上着から複雑な模様が彫られた金色の
ペンダントを出した。

「これは…」

手のひらに置かれたそれを指で触り形を確認した。

「色は…金色かしら？不思議な模様…」

手を掲げて目を細めてペンダントを見つめるディア様の横顔に見
惚れてしまう。

「……ギルダー当主に挨拶が出来なくて申し訳御座いません」

ハツと僕の方を見るディア様。

「話を誤魔化さないでリオ」

「誤魔化してなど…しかし、帰館するのは父の病が悪いからであっ
て…」

「そうだったの?!ごめんなさい。わがままを言って…リオはお父
様のお側に居るべきよ」

力なく微笑んだリオは、ディアに渡したペンダントを指した。

「ディア様へプレゼントです」

「…ありがとう。リオだと思って大切にするわ」

「……すぐに戻ってきますから心配しないで下さい」

僕は、彼女の金の一房を手にとると口づけを落としてローレンス
邸を後にした。

「お帰りなさいリオ」

向かった先は両親の寝室。

実は去年父が病で倒れたのだ。

その頃から、ハプスブルク家に戻り父の後継ぎをしなければいけないと、心の中では思っていた。

「大変な事になっているそうじゃないか」

寝たきりの父。

僕の記憶では威厳があり恐ろしい存在だった。

その父は、今では病に蝕まれていてやせ細り痛々しく感じた。

「はい。ハプスブルク家から支援を…」

「うむ…わしもローレンス夫妻とは親交がある。支援したいのは山々だが…」

チラリと見つめる先にある大量の書類の山。

「体調が回復しなくてな…手付かずのままなのだよ」

「アレを片付けたら…」

「すまないリオ。わしの尻拭いだがいの事をさせてしまつて」

咳き込む父の背を優しく撫でる母。

僕は首を振った。

「僕はローレンス家で様々な事を教えて頂いてきました。

その力を今、発揮する時です」

その日から僕はローレンス家を助けるべく寝る間も惜しんで、父の残した書類に目を通していった。

ローレンス家のギルダー当主は、一世代で貴族の称号

子爵を手に入れた。

位は低いが貴族なものには変わらない。

周囲の歴史ある貴族達からは成金貴族などと蔑まれていたが、ギルダー当主は一切気にし、臆する事もなく舞踏会に連日訪れていた。その時、ギルダー当主はハプスブルク家と出会い父の考え方に似通ったギルダー当主を父は気に入り、交流が増えたのがきっかけだった。

「今日、王宮で舞踏会ね…私もついて行ってやりたいのだけれど…」

「大丈夫よお母様。リオにきちんと指導してもらったのだから」

15の時より自信がついた。

もうあの時の私じゃないもの。

今まで居た侍女達は、お給金が出ないと言うことで早々にローン家から次々と立ち去って行った。

ドレスは夜会用のイブニングドレスを纏った。黒い艶のあるドレスに金の髪がよく映えた。

流石に髪の毛のセットは母親にしてもらった。

準備が出来、リオから貰ったペンダントを身につけた。

そつと表面に触れた。

リオが側に居るみたいで心が安らいだ気がした。

初めての舞踏会。

初めての王宮。

初めて見る他の貴族。

ディアにとつては初めての事、初めて肌で感じた世界だった。

大理石の階段を上り白亜の建物に足を踏み入れる。

よく考えたら、社交界デビューが今だから親しい友人なんて居ない。

ずっと居たのは執事のリオだけ。と言つても彼の容姿や年齢なんて聞かないとわからない。

年が離れていようがいまいかなんて関係なかった。

いつも側に居てくれたリオ。

けれど今はもう居ない。

勇気を貰うべく胸元で光るペンダントをギュツと握った。

それから深呼吸を繰り返してうっすらぼやけて見えるホールを見た。
据えた。

ホールに入つて来た金の髪と翠の瞳を持つ少女。

高く結つて髪留めで束ねられ晒された白くて長い首筋。

翠の瞳は、高貴な色。どこかの姫君かと思わせるくらい気高かつた。

そう思ったのは、どうやら俺だけではなかったそうだ。

彼女が入つて来た途端、他の男共は目の色を変えて魅入っていた。

周囲からはどこの令嬢かと疑問が浮かび上がっていた。確かに、年の頃は17、8だろう。

しかし、今までこう言う場で彼女を見たことなどなかった。

あれだけの美人だ。

目につかない筈がない。

彼女に声をかけようか迷っている男共の横を通り過ぎ、一直線に彼女の元へと向かう。

「……深緑の姫君…君にぴったりだろう？俺はリシャール伯爵だ」
よろしく。と彼女に手を差し出した。

「あつ…え…ありがとうございます。私はディア・ローレンスです」
「ローレンス…ああ…今いろいろ大変だね」

「はい。家が一大事なのに、私はこんな所に来てしまっ…」
けれど、これはリオとの約束。

社交界デビューだけはしておかなければならない。

生涯独身になってしまふからだと言われたけれど私はリオが傍に居てくれるのなら一生独身でも構わない。

でもリオにも人生がある。我が儘なんて言えない。

「今日がもしかして社交界デビュー？」

「ええ…毎回見逃していました」

「そう。なら光栄だ。社交界デビューして初めてのダンス相手をさせてもらえるんだからね」

「えっ?!ちよつと…私は…!」

腰を掴まれホールの中央へと無理矢理連れて行かれる。

「さあ。リラックスして」

顔を近づけて耳元で囁いたリシャール伯爵。

ディアの手首を持ち上げ手袋の上から甲に唇をつける。

が、瞬間的にその小さな手が消えた。

「勝手に僕の婚約者に口づけなどやめて頂きたい」

その聞き覚えのある声、息づかい。

間違いない。

「リオ?! リオなの?」

どうして此処に?!」

一介の執事が…

しかし、周囲は私とは違う意味でざわついていた。

「あつ…ハプスブルク家の…!」

「リオ様だわ! 初めてお見受けしたわ」

「あの名門貴族ハプスブルク家の跡取り息子だそうだよ」

「皇室と深い繋がりがあるそうだ」

「まあ! 本当に? ぜひお近づきになりたいわ」

目の前に立つリオを見上げる。

ちかちかと光る。

眩しさに目がくらくらする。

一瞬だけ、リオの後ろ姿が鮮明に見えた様な気がした。

「大丈夫ですか!?!」

背中に少し体重がかけられ振り返った。

ディアがもたれかかっていた。

「ええ。眩暈がして…いいえ、リオ…貴方…一体」

「ここは目立ちます。僕専用のサロンに行きます」

ヒョイト、ディアを軽々と抱えてホールから出ようとした。

「待て」

ゆっくり首だけ振り向くリオ。

「…貴方が言おうとしている事がわかります。僕と貴方の瞳の燃え

方が同じだから」

「…っ」

「しかし僕は言ったはずですよ。この娘は僕の婚約者…彼女のペンダントが何よりの証拠」

失礼します。と軽く会釈をしたりオは軽やかに…優雅に…ホールから立ち去った。

カウチに横たわらせて水をディアに手渡す。

「顔色が悪い」

「さつきから白い光が眩しくて…リオの顔もまともに見えないの」

「目の異変ですね。至急、医者を呼びます」

立ち上がったリオの裾をギュツと握った。

「私の事はいいの…それより、リオ…どうして貴方が…」

「…本当は…お忍びで貴女を見に来るつもりでした」

血の気の失せた頬に手を寄せるとすり寄るディアに少し照れた。

「会場に来てみれば貴女は、あのリシャール伯爵に捕まっている」

「有名な人、だったのですね」

「彼は悪い意味で有名だよ。プレイボーイとして」

君がああ毒牙に汚されなくて良かった。とリオは、ディアの頬に

口づけた。

ディアは内心、大袈裟ではないかと思ってしまうたがリオは大真面目に言っただけ。

「僕もこれでも一応有名なんだ」

「…リオはリオよ。ずっと私の傍に居てくれた。貴方が何者かなんてどうでもいい…」

「貴女らしい回答だ。僕は君のそんなところが大好きなんだ」

こんなに真剣に言われた事がなくて…告白されたのも初めてだけ
れど

私は困惑した。

こんな横たわった格好で聞いているなんて失礼じゃないのかと思
ってしまう。

「私、目が不自由なのよ？」

咄嗟に出た言葉に恥ずかしくなる。

「関係ない」

「家が今大変な事になっているのよ？」

「手は打ってある」

言っても言い返され迷う。

他に何か言うことがないか考え巡らせるが、思いつかなかった。

「貴女へプレゼントしたこのペンダントは…現国王が、僕の祖母に求婚した時に贈ったものだ」と両親から聞いているよ」

えっと驚嘆し、まじまじと撫でる表面。

「この模様はハプスブルク家の紋章だよ」

「そんな大切なものを…」

「結婚してほしい僕と…」

きつと今リオは微笑んでいるのだろう。

けれど、今の私には光が眩しくて彼を以前の様にみれない。

一瞬、世界が白に覆われた。

耳元で叫ぶリオの声。

私は意識を手放した。

眩しい。

まだ続く眩しさに顔を歪めて目を覚ました。

いつもと違う部屋。

見たことのない部屋。

金に装飾された調度品。

赤い絨毯。

いえ違う。

これは本当に私が見ている世界？

目にかかった靄が一気に消えて、広がる鮮明な世界。思わず、窓に近寄り外の景色を眺める。

みずみずしい緑の新芽。

彩り鮮やかな花々たち。

ディアの頬に一筋の涙が流れた。

「世界は、こんなにも美しかったのね」

感嘆し景色に魅入っていると背後から声をかけられた。

「大丈夫ですか？昨日倒れた後、僕の寝室に運ばさせていただきました」

微動だにしないディアを不審に思い近寄った。

「待つてリオ」

あと数歩でディアのもとに辿り着くところでストップをかけられる。

ゆっくりと振り向くディアは、目を瞑っている。

涙の跡らしきものが一筋。

そして、目蓋を開けた。

潤んだ翠玉の瞳が僕を見入る。

「ああ…リオ…黒い髪に灰色の瞳…」

「ディア！！！！」

僕は、すぐに彼女のディアのもとに寄り華奢な体を抱きしめた。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9088m/>

翠玉の瞳

2010年10月8日10時58分発行